



串田治ステップス三度目の個展である。今回串田は小 5、中 7、大 4 と、合わせて 16 点の作品を発表した。タイトルは凡て《Wrong Condition》と作品番号の組み合わせである。「状態が悪い」とは思えないレベルの高い作品群だ。

一度目の個展に対して私は「回転するゲシュタルト、それが串田の現実なのだ」、二度目の個展の際には「串田のストロークは視線が伴わない。そして、視線しか残されていない」と評した。

串田は過去二度の個展と同様、紙にアクリルを素材とし、ハードエッジの喪失を前提とし、色と形のせめぎ合いが主題となっていることに変化はない。当然、その条件でも全く異なる作品が生まれているのは脅威だが、今回は特にテイストが異なるように感じる。

串田ほどのベテランに、これまでどれだけの追究を行ってきたかと問うこと自体が愚問であるのだが、様々なスタイルの果てに現在の姿を探究していることについては当然のことである。

三度目だからこそ、自らの視線をリセットしてみよう。串

田が何を描いているのか。山口長男は 1953 年頃からイエロー・オーカーとアイボリー・ブルー、若しくはヴェネチアン・レッドとプルシアン・ブルーのという厳密な組み合わせで絵画を作成してきた。

山口と串田を較べると、串田の作品は決して二つの色を拮抗させているのではないことに気がつく。何故なら、凡ての画面は幾度も塗り重ねられ、果ては表面が地の色ではないかと考えることが出来るほどに、結果が存在しない。

多様な色の積み上げが、ある時突然に形を保ちだし、一つの画面に分岐して二つの色面を齎す。それが串田の作品ではないだろうか。すると山口のように始めから色を想定するのではなく、串田が用いる色彩とは同じ地点に生まれた同一のものであると憶測することが出来る。

しかし制作と現実という、串田が生きる場所は容易ではない。串田は同一であるために拮抗し、拮抗することは対決することではなく同一になることを前提に差異を明確にすることでもある。

串田の作品に吸い込まれる理由は、単一であることにある。

